

コラム 蛇の宮

松本市波田の鍋割の集落の北東、押出原に蛇の宮（押出権現）というお宮がありました。そこに大蛇の骨をまつてあると言い伝えられてきました。

むかしむかしのある年、いく日か雨がふりつづき、土地がすっかりいたんでいました。

そこへ、荒倉山（標高 1496m）から唐沢山（標高 1779m）にかけての山くずれがあり、夫婦堤が切れ、中沢がはんらんしました。

中・下波田方面の台地は、大きく東の方へ向かって傾いています、また同時に北にむかってもしだいに低く傾いています。だから、この台地を横切って、中波田の集落を通り、梓川の段丘に向かって土石流が押し出してきたのです。それが、さらにいまの波田駅の東方の段丘のあたりを乗りこえて、鍋割の東部を通り、押出の集落の南（押出原）まで達しました。

そのすさまじさと言ったら、まったく想像以上でした。人家をのみ、畑をくずして、おそろしい勢いで押し出したのです。村人たちは、そのあまりのおそろしさに驚き、おののきました。

土石流の跡を見ると、なにか白い骨のようなものがありました。「これは蛇の骨に違いない」というので、それを神さまが宿るものとし、「蛇の宮」にまつりました。

むかしの人は災害を起こす現象を「蛇ぬけ」とよび、大蛇がぬけていったんだと考えました。そして、そのような災害が二度と起こらないように、神さまをまつて祈ったのです（塚田, 1985）。

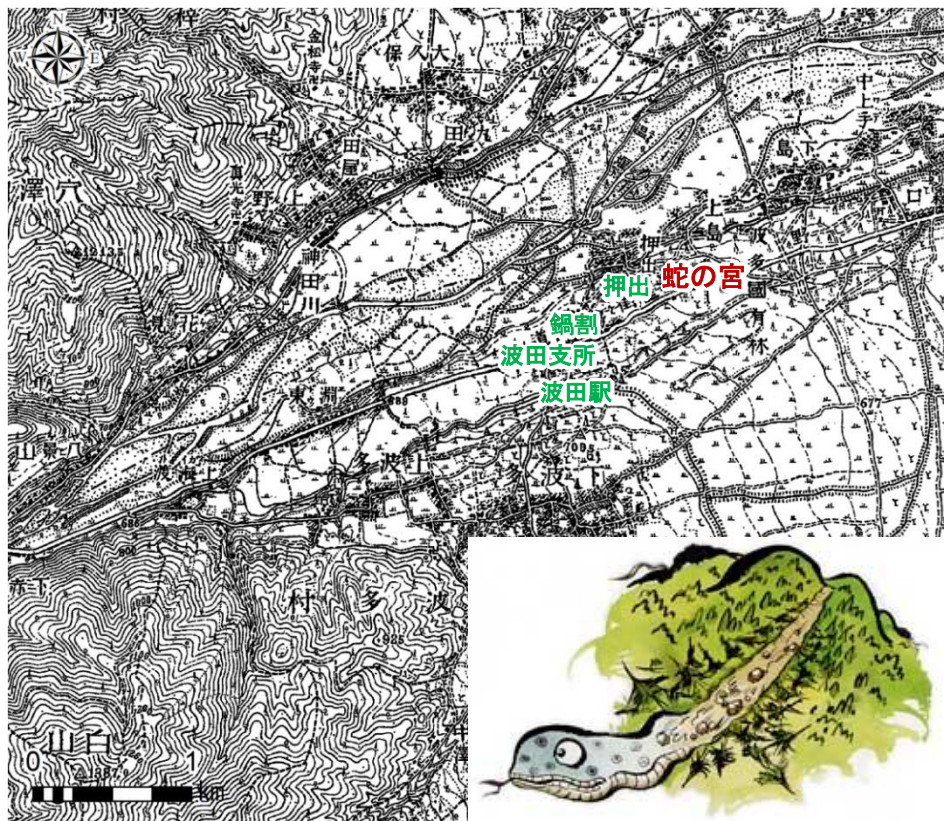


図 2.25 蛇の宮の伝承の災害状況図
(旧版地形図 (1/50,000 旧版地形図, 「松本」明治 43 年 (1910) 測図に加筆))



図 2.26 蛇の宮の伝承の災害状況図 (地理院地図「標準地図」に加筆)